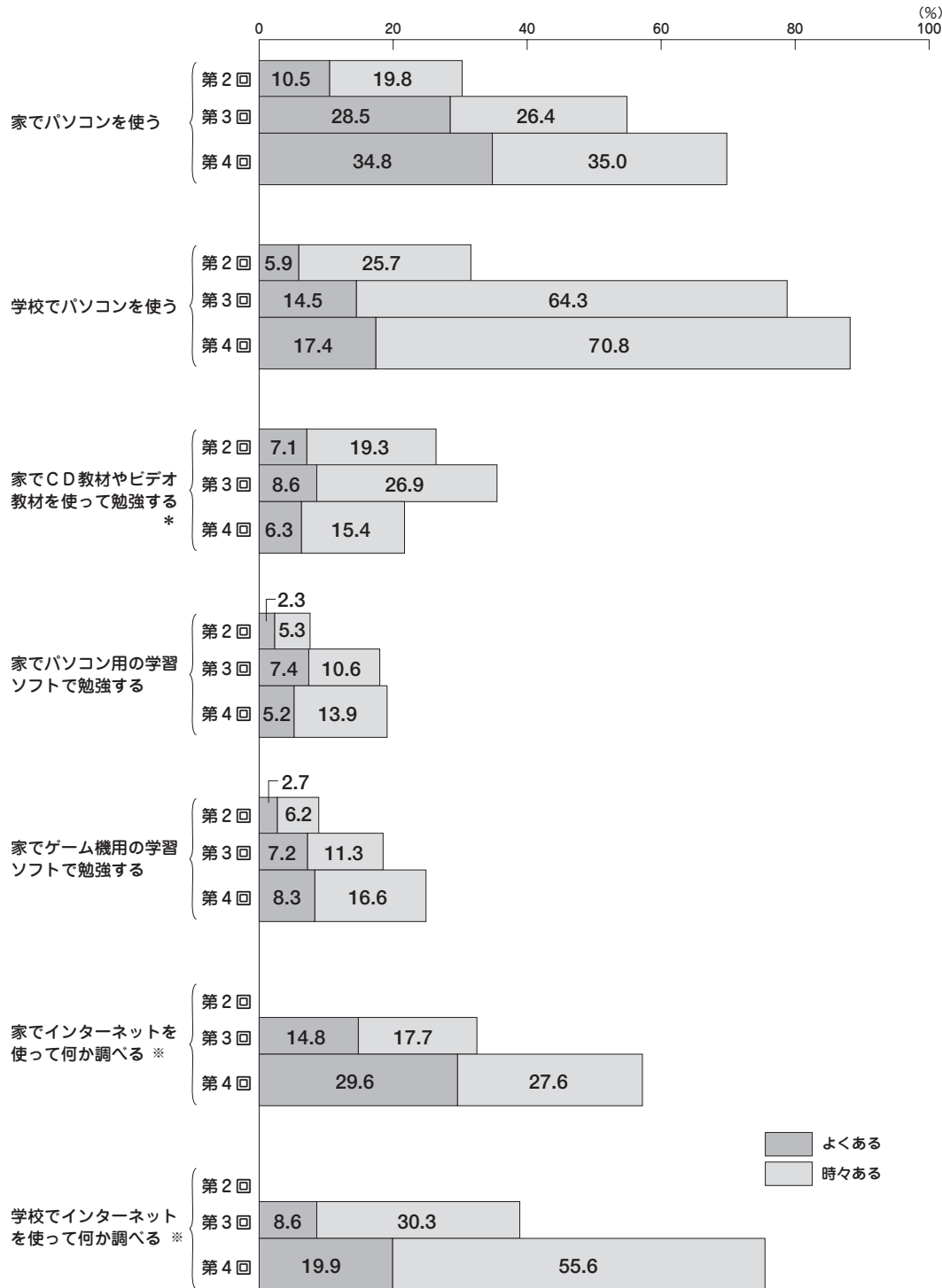


図2-1-14 メディアの利用(時系列)



注1) 第1回は該当項目なし。※は第2回に該当項目なし。
 注2) *は第2回は「カセットテープ教材やビデオ教材を使って勉強する」、第3回は「CD教材やビデオ教材を使って勉強する」。
 注3) サンプル数は第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

第2節

小学生の学習観・成績観・社会観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後にほぼ6割が集中。時系列的にみると、成績の自己評価は第1回から第4回にかけて、真ん中より上と回答する比率が高まっている。

Q | ●あなたの今の成績は、クラスの中でどのくらいですか。
 ●次の教科(算数、国語)の今の成績は、クラスの中でどのくらいですか。

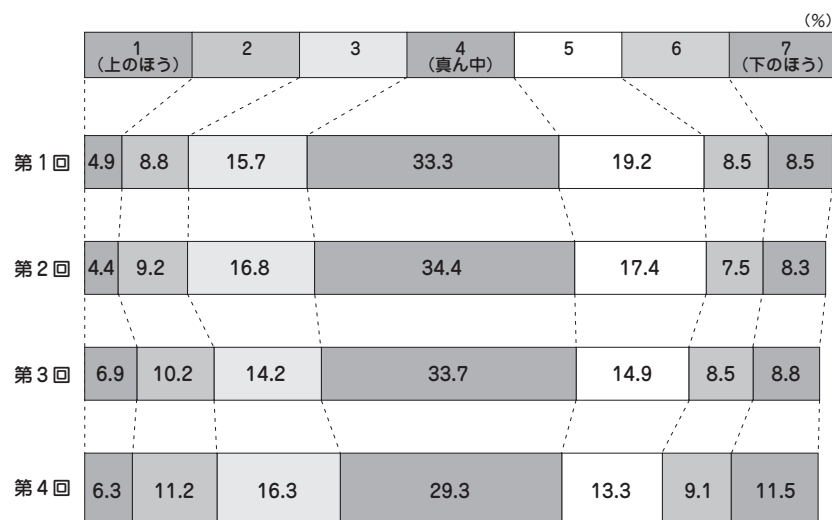
クラスの中で成績の自己評価について時系列での変化を図2-2-1に示した。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分けて、いずれかの段階を成績の自己評価にもとづき選択させた。全体を「上位層」(「1」「2」「3」、以下同)、「中位層」(「4」)、「下位層」(「5」「6」「7」、以下同)に三分位すると、第1回から第4回にかけて、成績の自己評価は真ん中より上と回答する比率がわずかながらではあるが高まっている。第1回からの比率をみると、第1回での上位層が29.4%であったのに対して、第4回では33.8%と4ポイント程度増加している。同様に下位層についてみると、第1回の36.2%に対し、第4回では33.9%とわずかながら減少している。

あくまでも自己申告ではあるものの、自己の成績を相対的に上位に位置づける小学生が増加していることがわかる。

また性別による違いを図2-2-2に示した。上位層をみると、男子は36.6%、女子は31.0%であり、中位層は男子で26.5%、女子で32.4%である。このことから、男子のほうがやや上方に自己の成績を位置づけ、女子は中間くらいに位置づける傾向があることがうかがえる。

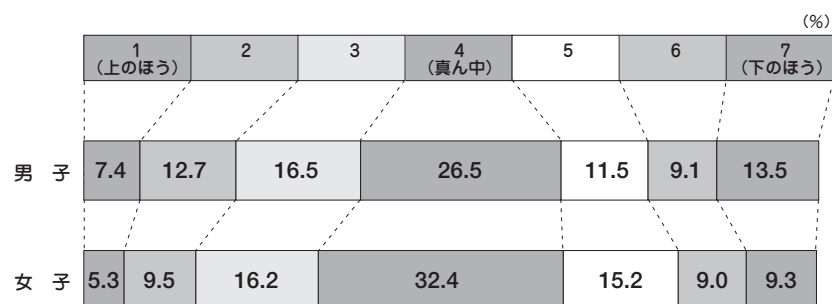
さらに教科別での成績の自己評価を図2-2-3に示した。「国語」は中位層に27.5%が集中している。しかし、上位層に注目すると、「国語」が34.0%、「算数」が42.5%である。相対的に「国語」より「算数」を上位に位置づけているといえよう。

図2-2-1 成績の自己評価(時系列)



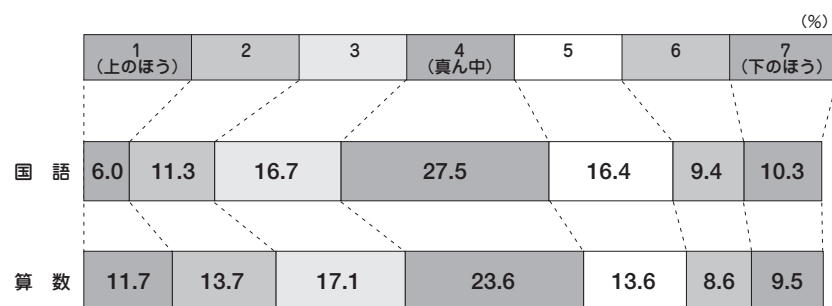
注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

図2-2-2 成績の自己評価(性別)



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は男子1,397名、女子1,310名。

図2-2-3 成績の自己評価(教科別)



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は2,726名。

② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、上位層に8割程度が集中し、真ん中から下の成績でよいと答えた小学生は約1割にとどまり、「よい成績をとりたい」と思う小学生が多い。また、がんばればとれると思う成績では、同様に8割程度の小学生が上位層をとれると考えている。

Q ●あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
●今の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

現在の成績に対する自己評価に続き、「どのくらいの成績がとれたらよいか(以下、とりたいと思う成績)」と「今の成績は別として、うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか(以下、がんばればとれると思う成績)」の側面をみてみよう。

とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績の時系列での変化を、表2-2-1に示した。まずとりたいと思う成績は、第1回から第4回まで「上位層」(「1(上のほう)」「2」「3」、以下同)に8割程度が集中しているが、その比率はほぼ一定である。またがんばればとれると思う成績は、第1回から第4回を通じて8割程度の小学生が上位層がとれると考えていることがわかる。つまりとりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績は、全体としては大きな変化が認められない。

さらに第4回について、現在の成績の自己評価、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績の分布状況を図2-2-4に示した。これによると、とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績は、上位層に集中していることが確認できる。しかし、「1」ではとりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績の乖離が14.4ポイントと顕著である。このことは、全体としてほとんどの小学生が自己評価している現在の成績よりも、さらに上位を望んでいることがうかがえる。し

かし「1」に関しては希望しているものの、がんばってもとれるとは思っていないようである。

では現在の成績の自己評価と、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績にはどのような関係がみられるのだろうか。

まず表2-2-2に現在の成績の自己評価ととりたいと思う成績のクロス集計を示し、成績の自己評価のそれぞれでの最頻値に○をつけた。さらに成績の自己評価ととりたいと思う成績が同じ区分のところにアミをかけている。つまりアミをかけた部分より上にある現在の成績を希望していることになる。成績の自己評価が「1」「2」では、8割以上が「1」を希望している。また自己評価が「3」「4(真ん中)」の場合でもとりたいと思う成績は「1」とする比率が高い。さらに「下位層」(「5」「6」「7(下のほう)」、以下同)と自己評価している小学生においても、上位層を希望する比率は高い(「5」79.5%、「6」64.0%、「7」50.6%)。

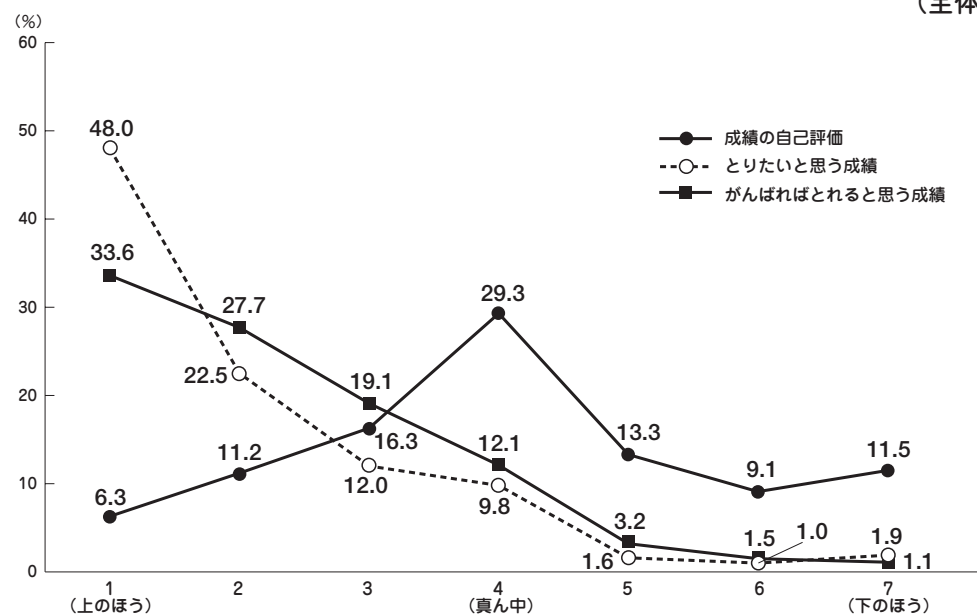
同様に表2-2-3で現在の成績の自己評価とがんばればとれると思う成績のクロス集計を示した。とりたいと思う成績(表2-2-2)の場合と比べ、がんばればとれると思う成績は下位層の小学生が上位層を選択する比率は低くなり、より現在の自己評価に近い「3」や「4」と回答している。

表2-2-1 とりたいたいと思う成績・がんばればとれると思う成績(時系列)

		(%)			
		第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,402)	第4回 (2,726)
とりたいたいと思う成績	1(上のほう)	49.7	45.9	< 52.8	48.0
	2	24.1	23.5	21.0	22.5
	3	13.4	15.1	11.4	12.0
	4(真ん中)	9.5	10.4	10.1	9.8
	5	1.2	1.5	1.5	1.6
	6	0.8	1.0	1.0	1.0
	7(下のほう)	1.0	1.4	1.3	1.9
がんばればとれると思う成績	1(上のほう)	31.0	29.9	30.6	33.6
	2	31.1	30.4	30.2	27.7
	3	21.1	20.8	21.1	19.1
	4(真ん中)	12.8	13.4	12.5	12.1
	5	2.0	2.9	2.8	3.2
	6	0.9	0.9	1.0	1.5
	7(下のほう)	0.7	1.1	0.8	1.1

注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) <>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-2-4 成績の自己評価・とりたいたいと思う成績・がんばればとれると思う成績(全体)



注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) サンプル数は2,726名。

表2-2-2 とりたいたいと思う成績(成績の自己評価別)

		(%)						
		成績の自己評価						
		1 (上のほう)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (下のほう)
とりたいたいと思う成績	1(上のほう)	93.6	83.3	61.6	40.9	27.3	23.5	30.9
	2	2.9	13.1	26.3	32.8	30.7	16.2	8.6
	3	1.2	0.7	5.2	14.5	21.5	24.3	11.1
	4(真ん中)	0.0	0.7	2.7	6.4	15.7	23.5	25.5
	5	0.0	0.0	0.7	1.8	1.1	4.0	4.1
	6	0.0	0.0	0.4	0.5	0.8	2.0	3.8
	7(下のほう)	1.2	0.3	0.2	0.8	0.3	1.6	11.5

注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) 成績の自己評価別での最頻値に○をつけた。
 注3) 成績の自己評価ととりたいたいと思う成績の同じ区分にアミをかけている。
 注4) サンプル数は2,726名。

表2-2-3 がんばればとれると思う成績(成績の自己評価別)

		(%)						
		成績の自己評価						
		1 (上のほう)	2	3	4 (真ん中)	5	6	7 (下のほう)
がんばればとれると思う成績	1(上のほう)	95.4	88.2	49.7	20.2	9.7	6.5	8.3
	2	3.5	9.2	39.8	45.7	25.4	12.6	12.7
	3	0.6	1.3	5.8	26.9	40.3	27.9	14.0
	4(真ん中)	0.0	0.3	2.0	4.1	19.3	42.1	33.1
	5	0.0	0.0	0.4	1.3	3.3	7.7	13.7
	6	0.0	0.0	0.9	0.5	0.3	0.4	9.6
	7(下のほう)	0.6	0.3	0.2	0.4	0.3	0.8	6.7

注1) 無回答・不明は省略した。
 注2) 成績の自己評価別での最頻値に○をつけた。
 注3) 成績の自己評価とがんばればとれると思う成績の同じ区分にアミをかけている。
 注4) サンプル数は2,726名。

③ 成績観・学力観

時系列でみると「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(名門高校・大学志向)」が第3回から一貫して高く、ほぼ7割を占める。一方で「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない(学校生活エンジョイ志向)」「そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう」は、第3回に比べ、減少している。

Q | あなたは、次のように思うことがありますか。

小学生が成績や学力についてどのように考えているのかについて、時系列での変化をみていく(図2-2-5)。「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(以下、名門高校・大学志向)」が第3回から一貫して高く、ほぼ7割を占める。また「今は勉強することが一番大切なことだ」がわずかながら増加し43.6%であった。

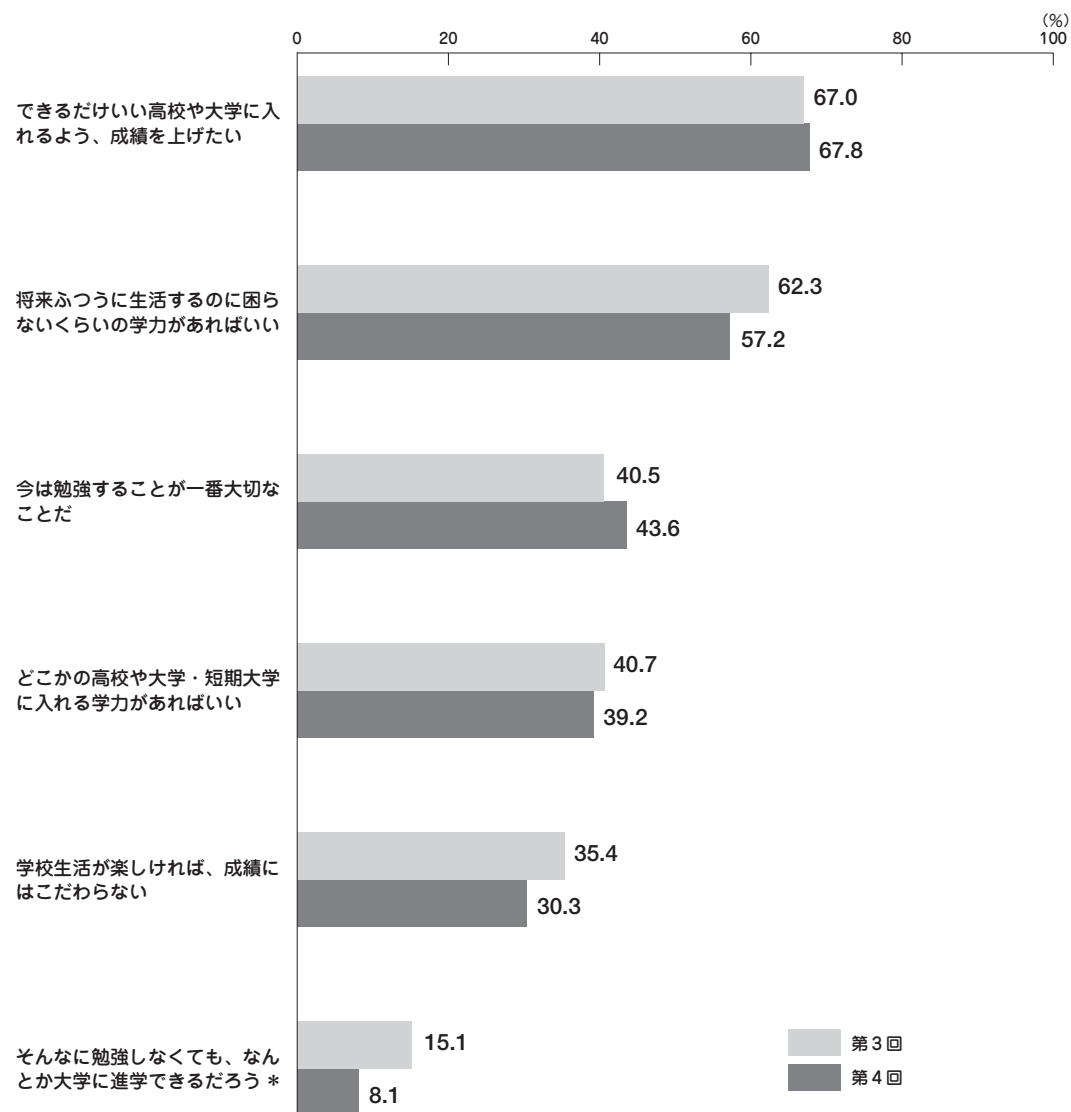
一方で「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(以下、ふつうの生活志向)」「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない(以下、学校生活エンジョイ志向)」「そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう」は、第3回に比べ、減少している。

つづいて成績観・学力観の性別での違いを

表2-2-4に示した。性別で顕著な差がみられたのは「名門高校・大学志向」であり、女子のほうが高かった(女子71.8%>男子64.1%)。一方で「学校生活エンジョイ志向」は男子のほうが高かった(男子32.6%>女子27.8%)。

また成績の自己評価別での成績観・学力観の違いを表2-2-5に示した。上位層ほど「名門高校・大学志向」の比率が高く、逆に「ふつうの生活志向」「学校生活エンジョイ志向」の比率は低くなる傾向がみられる。とくに上位層と下位層での差が顕著であったのが、「名門高校・大学志向」(上位層76.1%>下位層58.8%)、「ふつうの生活志向」(下位層64.5%>上位層47.5%)でそれぞれ17ポイント程度の開きがみられた。

図2-2-5 成績観・学力観(時系列)



注1) 複数回答。
 注2) *は第3回では「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」。
 注3) 第1回・第2回は該当項目なし。
 注4) サンプル数は第3回2,402名、第4回2,726名。

表 2-2-4 成績観・学力観（性別）

	(%)	
	男子 (1,397)	女子 (1,310)
できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい	64.1	< 71.8
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	57.3	56.8
今は勉強することが一番大切なことだ	43.1	44.3
どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい	38.4	40.2
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	32.6	27.8
そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう	10.1	5.9

注1) 複数回答。
注2) <>は5ポイント以上差があるもの。
注3) () 内はサンプル数。

表 2-2-5 成績観・学力観（成績の自己評価別）

	(%)			
	上位層 (924)	中位層 (799)	下位層 (923)	
できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい	76.1	> 69.0	≫ 58.8	
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	47.5	≪ 59.1	< 64.5	
今は勉強することが一番大切なことだ	43.9	44.6	42.9	
どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい	34.8	< 44.2	> 38.5	
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	24.4	< 29.8	< 36.0	
そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう	7.0	6.6	10.5	

注1) 複数回答。
注2) ≪≫は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
注3) () 内はサンプル数。

2. 学習していて感じること

小学生が学習していて感じることで、理科への感動の比率が80.6%と非常に高い。2番目に高かったのは国語への意欲で71.4%であった。時系列比較では、理数系科目が健闘している。理科への感動は8割強で高止まりし、興味は7.4ポイントの大幅増。算数についても、感動が5.2ポイント、興味が4.3ポイント増加した。

Q | あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか。

ここでは、各教科について小学生の学習への構えを「感動（すばらしい、ふしぎだなと感じる）」と「興味」の観点からたずねている（国語は興味と意欲をたずね、英語は意欲をたずねている）。

最初に、図2-2-6の第4回調査の結果から今の小学生が学習していて感じることをみてみよう。感動・興味・意欲といった事柄は、「確かな学力」の核になるべきものであるが、もっとも高い値だったのは理科の「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる（以下、感動）」で、「よくある」と「時々ある」と答えた合計比率（以下同）は80.6%と非常に高い値になっている。理科の「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ（以下、興味）」も63.6%と6割を超える小学生が興味を抱いていた。

2番目に高かったのは国語の「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う（以下、意欲）」で71.4%と7割強であった。「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる（以下、興味）」も61.2%と6割を超える値であった。

これに対して算数はやや低い値で、「算数の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる（以下、感動）」が60.5%、「算数の問題の解き方を考えたり工夫したり

するのか好きだ（以下、興味）」が52.8%であった。社会では、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる（以下、感動）」は63.0%あったものの、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ（以下、興味）」は46.0%にとどまっている。

最後に、「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい（以下、意欲）」は56.6%であった。現場では英語は楽しいという声をよく聞くが、楽しさは感じて、意欲にまでは発展しきっていないのかもしれない。

同じく図2-2-6を用いて、時系列の変化をみていく。ここでは第2回と第4回の比較となっている。

この図でまず気がつくのは、理数系科目の健闘である。世の中では理数系離れということがいわれているが、理科・感動は8割強で高止まりし、理科・興味は7.4ポイントの大きな増加をみせている。算数についても、感動が5.2ポイント増加し、興味が4.3ポイント増加している。その他では、社会・興味も3.3ポイント増加している。

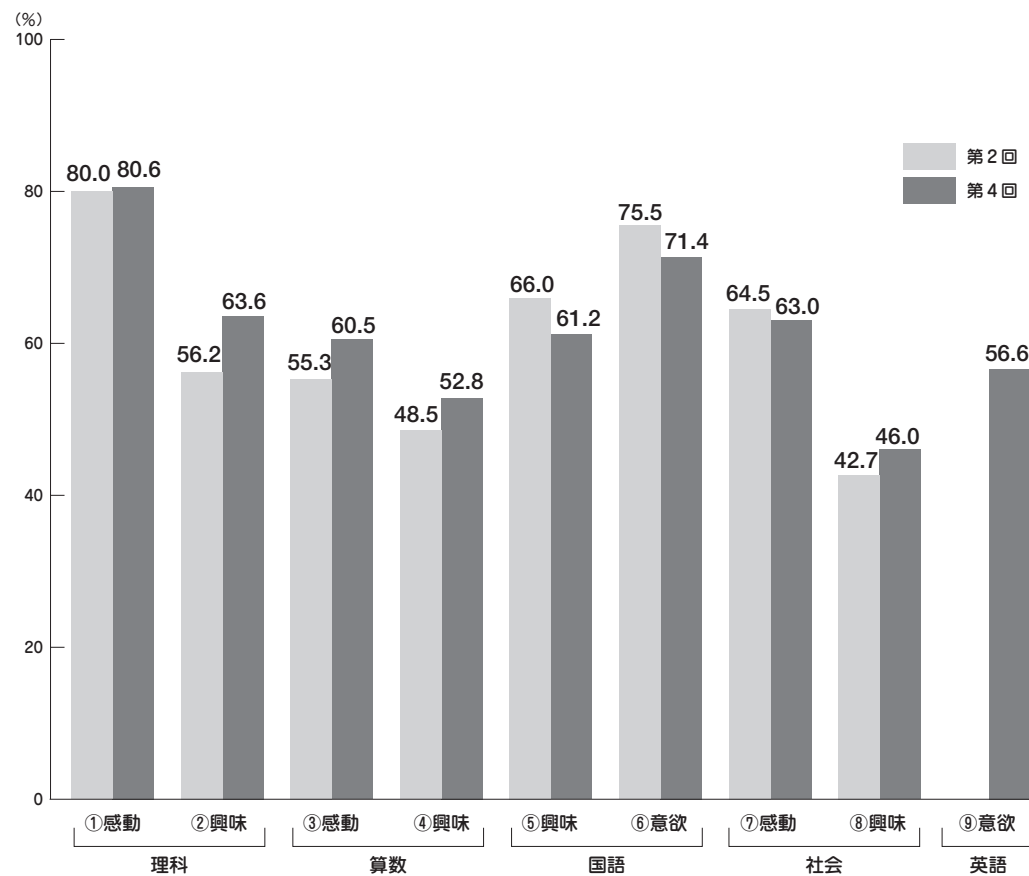
これらに対して、感動・興味・意欲が減少してしまったのは、国語の興味（4.8ポイント）および意欲（4.1ポイント）である。

学習していて感じることを性別、成績の自

己評価別にみたのが表2-2-6である。男子のほうが高かったのは理科・興味(男子67.5%>女子59.4%、以下同)、算数・興味(57.2%>48.3%)などである。理数系科目への興味は、男子のほうが強いようだ。反対に

女子のほうが高かったのは国語・興味(女子68.4%>男子54.5%、以下同)、国語・意欲(79.1%>64.2%)、英語・意欲(69.0%>45.3%)などである。女子は文学・語学系科目への興味・意欲が強いようだ。

図2-2-6 学習していて感じること(時系列)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) 各項目名(①~⑨)は表2-2-6に対応する。
 注3) 英語は第2回に該当項目なし。
 注4) サンプル数は第2回2,665名、第4回2,726名。

表2-2-6 学習していて感じること(性別・成績の自己評価別)

		(%)				
		男子 (1,397)	女子 (1,310)	上位層 (924)	中位層 (799)	下位層 (923)
①理科・感動	生き物や自然を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	79.0	82.5	84.7	82.3	75.4
②理科・興味	生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ	67.5	59.4	68.5	66.1	57.0
③算数・感動	算数の考え方や解き方を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	60.9	60.5	72.1	62.6	47.8
④算数・興味	算数の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ	57.2	48.3	71.3	50.4	37.6
⑤国語・興味	国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる	54.5	68.4	73.3	63.6	48.3
⑥国語・意欲	自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う	64.2	79.1	79.8	74.2	61.0
⑦社会・感動	社会のしくみや歴史のできごとを「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	62.4	63.7	72.4	65.8	52.2
⑧社会・興味	社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ	48.4	43.4	57.7	47.4	33.8
⑨英語・意欲	英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい	45.3	69.0	63.7	56.9	50.0

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
 注2) ()内はサンプル数。

3. 学習上の悩み

学習上の悩みはあまり深刻な状況ではない。今回調査対象となった小学生は、悩みよりも、意欲や喜びで形容されるのがふさわしいようだ。学習上の悩みに影響を与える要因をみると、上手な勉強の仕方がわかっている小学生はそうでない小学生と比べて学習上の悩みが少ない。また、宿題を提出しない小学生ほど学習上の悩みを感じている。

Q | あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

この調査では、学習上の悩みを7項目、学習上の意欲・喜びを4項目たずねている(表2-2-7)。

学習上の悩みについては、もっとも比率が高かったのが「どうしても好きになれない科目がある」62.9%である。第2位以下は、「覚えなければいけないことが多すぎる」35.4%、「わかりやすい授業にしてほしい」33.3%、「4年生までにもっと勉強しておけばよかった」31.1%、「上手な勉強の仕方がわからない」30.4%、「親の期待が大きすぎる」15.3%、「何のために勉強しているのかわからない」8.9%と続く。

このようにみえてみると、「どうしても好きになれない科目がある」の6割強を除くと、他の項目は3割台以下であり、小学生の学習上の悩みはそれほど深刻ではないということがいえよう。

一方、悩みと比べて、意欲・喜びは高い値になっている。第1位は、「問題が解けたり、何かがわかるとうれしい」80.1%。第2位は「もっと成績をよくしたい」78.7%、第3位は「新しいことを知るのが好きだ」60.0%、そして第4位が「勉強で友だちに負けたくない」56.8%であった。いずれも悩みの項目と比べて高めの値になっている。

以上から、今回調査対象となった小学生は、悩みよりも、意欲や喜びで形容されるのがふ

さわしいようだ。

表2-2-8から、悩みについての時系列比較を行おう。大きな特徴としては、悩みがあると答える比率がだんだん低くなる傾向にある。「どうしても好きになれない科目がある」が第1回と第4回で比較すると8.0ポイントの減少(第1回70.9%→第4回62.9%、以下同)、「覚えなければいけないことが多すぎる」が7.6ポイントの減少(43.0%→35.4%)、「わかりやすい授業にしてほしい」が10.3ポイントの減少(43.6%→33.3%)、「上手な勉強の仕方がわからない」が7.7ポイントの減少(38.1%→30.4%)であった。

次に学習上の悩みの規定要因を考えてみよう。図2-2-7は、上手な勉強の仕方がわかっているか否かと学習上の悩みの多寡の関係を示している。一目みて明らかなように、「上手な勉強の仕方がわからない」と回答した小学生と比べてそうではないと答えた(つまり、「上手な勉強の仕方がわかる」)小学生は、「どうしても好きになれない科目がある」と答える比率が少ない(「わからない小学生」78.6%>「わかる小学生」56.1%、以下同)。同じように「覚えなければいけないことが多すぎる」(56.3%>26.3%)、「わかりやすい授業にしてほしい」(53.2%>24.7%)、「4年生までにもっと勉強しておけばよかった」(49.2%>23.2%)、「親の期待が大きすぎる」(22.3

%>12.3%)、「何のために勉強しているのかわからない」(18.2%>4.8%)などとなり、上手な勉強の仕方がわかっている小学生は、そうでない小学生と比べて学習上の悩みが少ない。態度・意欲・関心だけでなく、「確かな学力」が求めるような勉強をこなしていく技術、つまり、上手な勉強の仕方を教える重要性を示す結果である。

図2-2-8は、宿題の提出状況別に学習上の悩みをみたものである。「出された宿題をきちんとやっていく」という項目に「あてはまらない」「まああてはまる」「あてはまる」と答えた順に(つまり宿題をやらない小学生ほど)学習上の悩みが深まっていくことがわかる。宿題指導の重要性が表れている結果である。

表2-2-7 学習上の悩み・意欲・喜び(全体)

	(%)
<学習上の悩み>	
どうしても好きになれない科目がある	62.9
覚えなければいけないことが多すぎる	35.4
わかりやすい授業にしてほしい	33.3
4年生までにもっと勉強しておけばよかった	31.1
上手な勉強の仕方がわからない	30.4
親の期待が大きすぎる	15.3
何のために勉強しているのかわからない	8.9
<意欲・喜び>	
問題が解けたり、何かがわかるとうれしい	80.1
もっと成績をよくしたい	78.7
新しいことを知るのが好きだ	60.0
勉強で友だちに負けたくない	56.8

注1) 複数回答。

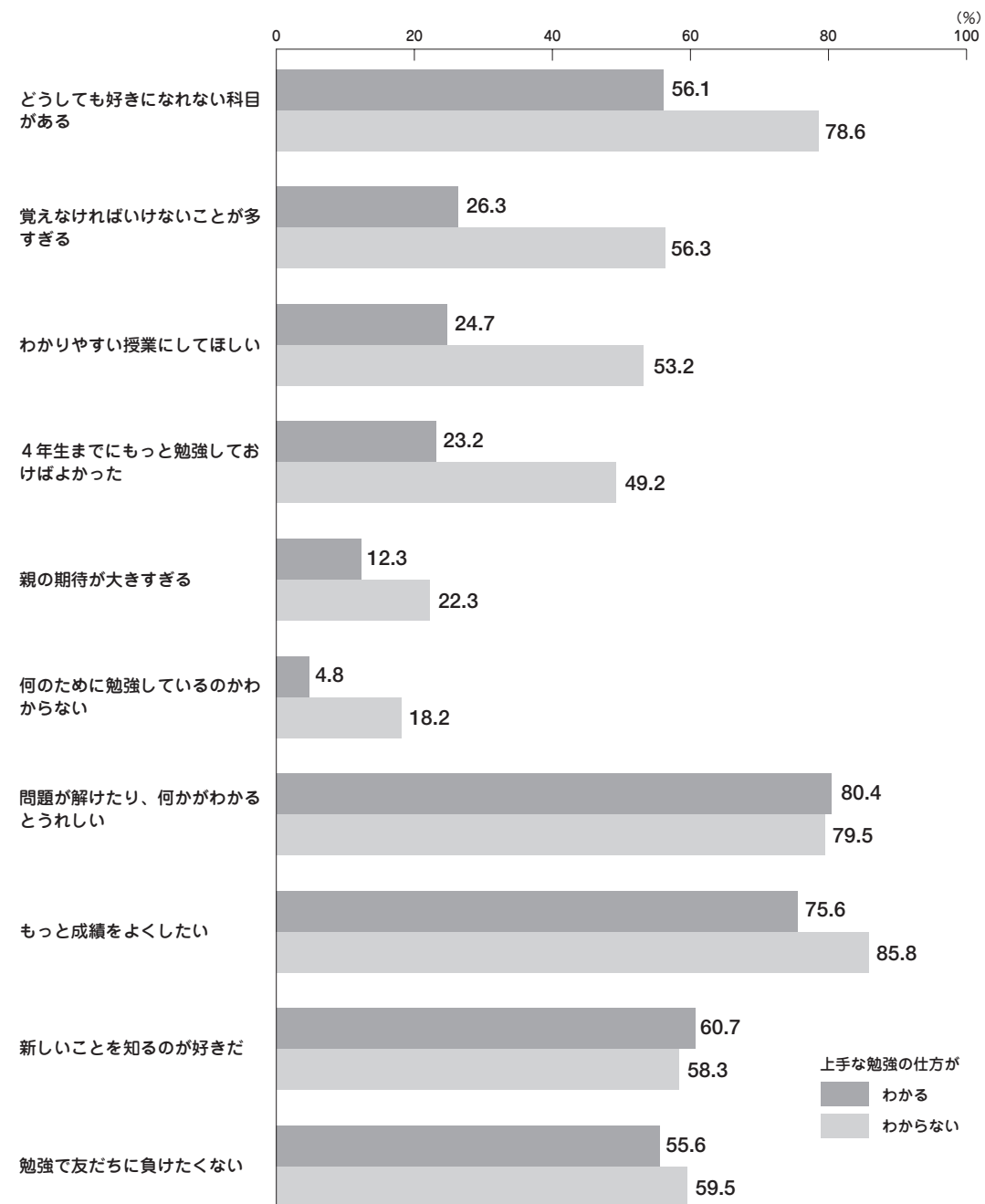
注2) サンプル数は2,726名。

表2-2-8 学習上の悩み・意欲・喜び(時系列)

	(%)			
	第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,402)	第4回 (2,726)
〈学習上の悩み〉				
どうしても好きになれない科目がある	70.9	65.7	63.7	62.9
覚えなければいけないことが多すぎる	43.0	40.0	39.7	35.4
わかりやすい授業にしてほしい	43.6	39.3	41.3	33.3
4年生までにもっと勉強しておけばよかった	—	—	35.4	31.1
上手な勉強の仕方がわからない	38.1	34.6	30.5	30.4
親の期待が大きすぎる	—	—	—	15.3
何のために勉強しているのかわからない	10.3	11.4	12.6	8.9
〈意欲・喜び〉				
問題が解けたり、何かがわかるとうれしい	80.1	82.3	81.0	80.1
もっと成績をよくしたい	81.3	78.2	80.3	78.7
新しいことを知るのが好きだ	58.1	55.7	62.3	60.0
勉強で友だちに負けたくない	60.0	55.2	55.5	56.8

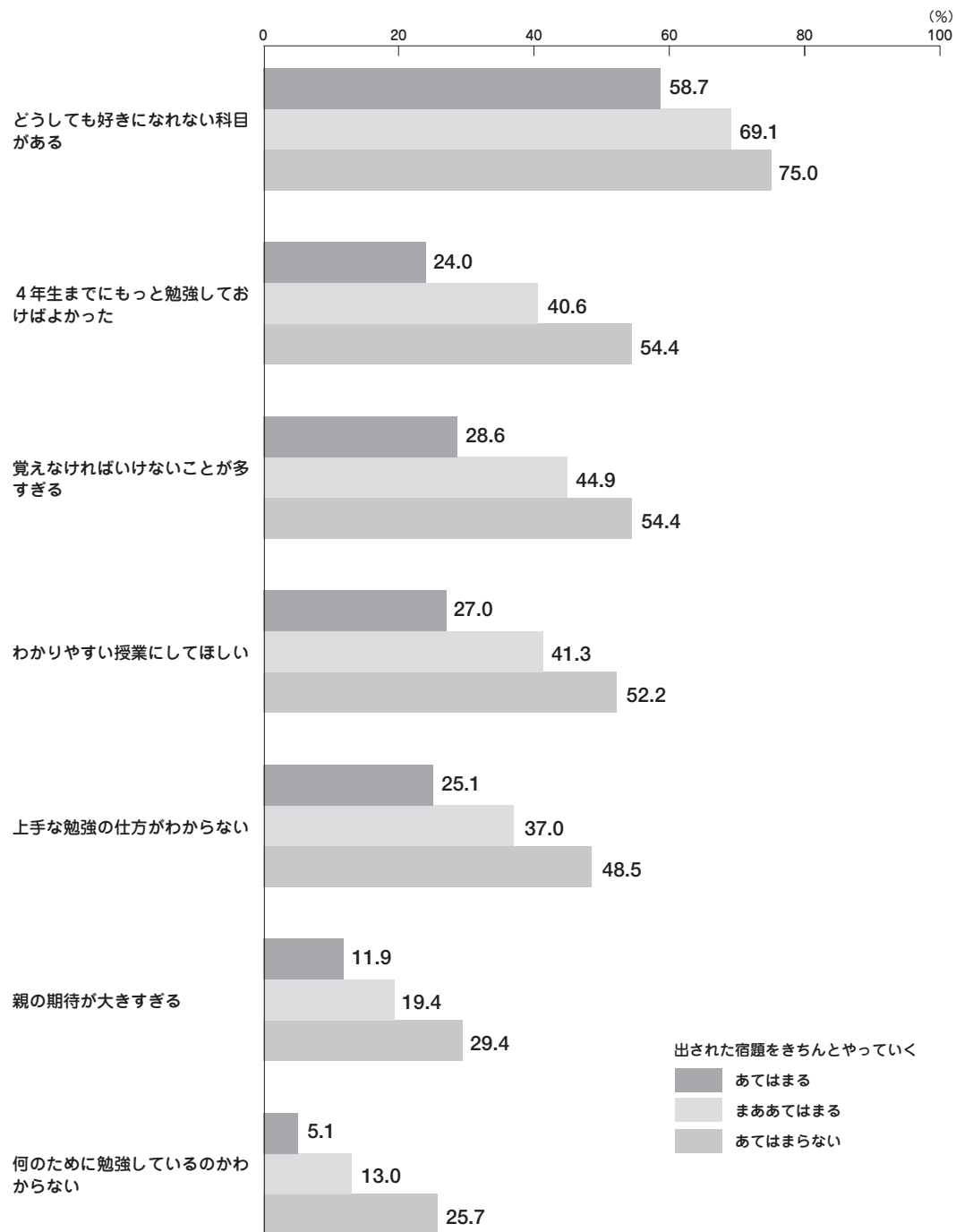
注1) 複数回答。
注2) —は該当項目なし。
注3) ()内はサンプル数。

図2-2-7 学習上の悩み・意欲・喜び(上手な勉強の仕方がわかる・わからない別)



注1) 「上手な勉強の仕方がわからない」という項目の選択非選択別に他の学習上の悩みについての回答を集計。「わかる」は同項目を選択しなかった小学生、「わからない」は選択した小学生。
注2) 複数回答。
注3) サンプル数は「わかる」1,897名、「わからない」829名。

図2-2-8 学習上の悩み(宿題の提出状況別)



注1) 「出された宿題をきちんとやっていく」という項目に「あてはまる」「まああてはまる」「あてはまらない」と回答したそれぞれの小学生別に学習上の悩みについての回答を集計したものである。
 注2) 複数回答。
 注3) サンプル数は「あてはまる」1,658名、「まああてはまる」905名、「あてはまらない」136名。

4. 進路・進学意識

① 受験と希望する進学段階

中学受験を希望する小学生の比率は、今回の調査で23.5%を示しており、第1回(15.7%)から第3回(17.9%)までの微増傾向と大きく異なっている。受験を希望する中学校の種類については、半数以上の小学生が「私立中学校」を受験先として希望している。希望する進学段階は、「わからない」と回答する小学生の比率が、第3回よりさらに減少して18.8%となっており、小学生の進路意識の明確化がいっそう進んでいることがわかる。

- Q**
- あなたは、どこかの中学校(私立中学校や大学の附属中学校、中高一貫校など)を受験しようと思っていますか。【「はい」と答えた人にお聞きします】
どのような中学校を受験しようと思っていますか。
 - あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

中学受験を希望する小学生の比率は、今回の調査で23.5%を示しており、第1回(15.7%)から第3回(17.9%)までの微増傾向と大きく異なっている(図2-2-9)。これは、第3回が行われた2001年以降に問題となった「学力低下」への社会的な関心を反映した進路選択の意識ととらえることができる。第4回についてみると、受験を希望する男子は22.1%、女子は25.0%となっており、性別による大きな違いはない。図は省略するが、これは第3回と同様の傾向である(男子18.2%、女子17.6%)。

成績の自己評価と中学受験希望の関連をみてみよう(図2-2-10)。上位層の場合、37.4%が受験を希望し、下位層だと12.9%と低い。逆に、受験を希望しない小学生の比率は、上位層だと25.1%で、下位層だと31.9%となっている。受験希望の比率を地域別にみると(図2-2-10)、大都市37.7%に対して地方都市17.3%、郡部11.3%となっている。中学受験を希望するかどうかは、保護者の教育観、家計水準による影響とともに、そもそも、受験できる中学校がその地域にあるかどうか

という地域間の格差を反映した結果といえるのではないだろうか。

中学受験を希望する小学生に限定して、受験しようと思っている中学校の種類をたずねた結果が表2-2-9である。半数以上の小学生が「私立中学校」を受験先として希望し、「国立大学の附属中学校」「公立の中高一貫校」「まだ決めていない」がそれぞれ2割前後となっている。近年、その数を増やしつつある「公立の中高一貫校」を希望する小学生が約2割いることは注目に値する。成績の自己評価別では、上位層の場合、9割近くの小学生がすでに受験する中学校の種類を決めており、下位層の場合、「まだ決めていない」が31.9%となっている。

表2-2-10は、希望する進学段階をたずねた結果である。この表で注目すべき点は3つある。第一に、「わからない」と回答する小学生の比率が、第3回よりさらに減少して18.8%となった点である(第1回32.7%→第2回29.2%→第3回20.6%)。このことから小学生の進路意識の明確化がいっそう進んでいることがわかる。こうした傾向は、たとえば、

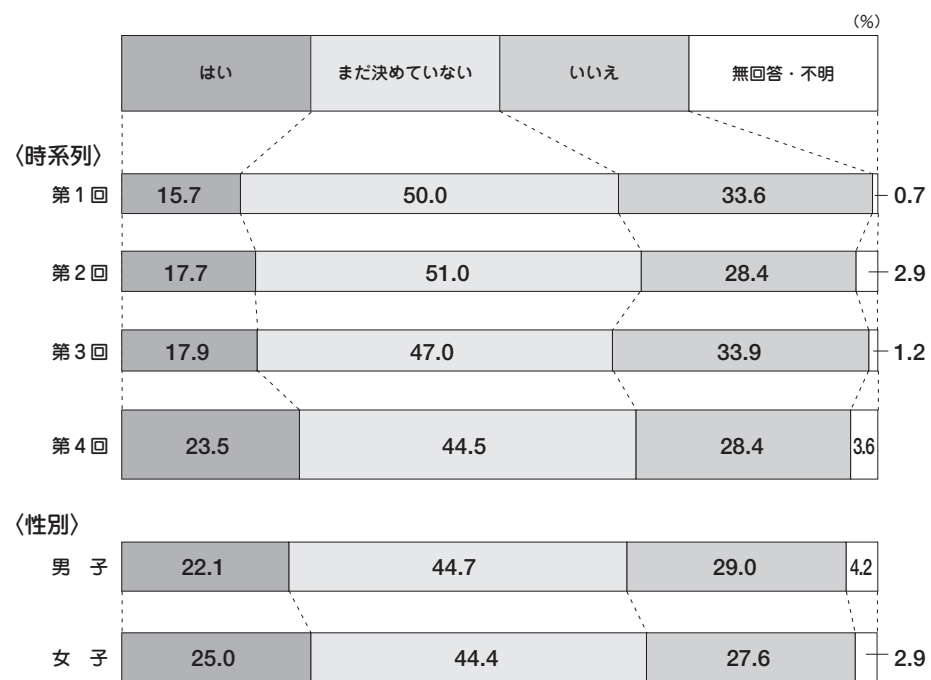
「総合的な学習の時間」などを活用したキャリア教育、また、現在社会的な関心を集めている若者の就業問題（「フリーター」「ニート」など）への対策が、「職業意識の形成」に強く焦点化されていることと無関係ではないだろう。第二に、第1回から第3回まで進んできた高学歴志向の弱まりの行方である。「中学校まで」「高校まで」「専門学校・各種学校まで」の3つの数値を合わせると、第1回28.1%→第2回36.4%→第3回46.6%→第4回43.5%となっている。他方、「四年制大学まで」と「大学院まで」の合計をみると、第1回23.2%（ただし、第1回は「大学院まで」の選択肢はない）→第2回24.8%→第3回22.8%→第4回26.9%となっている。高学歴を志向しない小学生の比率は第1回から第3回の増加傾向から微減へと変化し、高学歴を志向する小学生の比率はほぼ横ばいながらも第3回から微増傾向にある。第三に、「専門学校・各種学校まで」を希望する比率が第1

回から継続的に増加傾向を示している点である。先にあげた2点の特徴と考え合わせると、これまで「わからない」と回答していた小学生たちが「専門学校・各種学校まで」希望と回答している可能性が高いのではないだろうか。

性別では、「高校まで」という回答（男子25.6%>女子17.6%）、「専門学校・各種学校まで」という回答（女子26.5%>男子12.7%）において大きく異なっている。

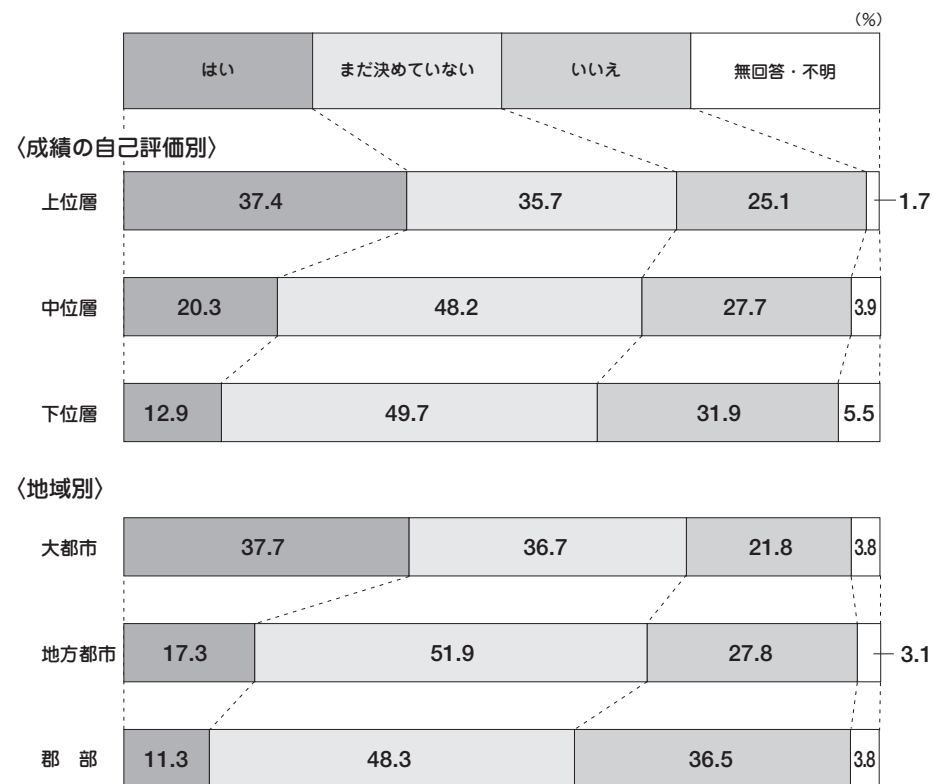
成績の自己評価別では（表2-2-11）、下位層の小学生ほど「高校まで」と回答する比率が高く（下位層29.6%>中位層21.4%>上位層14.6%）、上位層の小学生ほど「四年制大学まで」と回答する比率が高くなっており（上位層23.8%>中位層15.0%>下位層11.1%）、「大学院まで」という回答でも、成績と希望する進学段階の強い相関が確認できる（上位層15.8%>中位層9.6%>下位層5.5%）。

図2-2-9 中学受験の希望（時系列・性別）



注) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。男子1,397名、女子1,310名。

図2-2-10 中学受験の希望（成績の自己評価別・地域別）



注) サンプル数は上位層924名、中位層799名、下位層923名。大都市1,105名、地方都市684名、郡部937名。

表2-2-9 受験しようと思っている中学校の種類（全体・成績の自己評価別・地域別）

	全体 (641)	上位層 (346)	中位層 (162)	下位層 (119)	大都市 (417)	地方都市 (118)	郡部 (106)
私立中学校	51.5	61.8	40.1	38.7	63.8	24.6	33.0
国立大学の附属中学校	21.5	28.0	15.4	10.9	22.3	23.7	16.0
公立の中高一貫校	19.5	20.2	17.3	21.0	20.4	16.1	19.8
まだ決めていない	22.9	13.9	34.6	31.9	14.9	39.0	36.8

注1) 複数回答。
注2) 「どこかの中学校を受験しようと思っていますか」に「はい」と答えた小学生641名のみを対象。
注3) ()内はサンプル数。

表2-2-10 希望する進学段階(時系列・性別)

	(%)					
	第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,402)	第4回 (2,726)	第4回	
					男子 (1,397)	女子 (1,310)
中学校まで	1.2	2.1	3.6	2.3	3.0	1.6
高校まで	19.4	23.4	27.8	21.8	25.6	17.6
専門学校・各種学校まで	7.5	10.9	15.2	19.4	12.7	26.5
短期大学まで	15.7	8.4	7.9	7.4	7.1	7.9
四年制大学まで	23.2	14.4	13.5	16.7	17.6	15.5
大学院まで	—	10.4	9.3	10.2	10.9	9.5
その他	—	—	1.3	0.8	1.0	0.5
わからない	32.7	29.2	20.6	18.8	18.9	18.8
無回答・不明	0.3	1.2	0.9	2.6	3.2	2.1

注1) —は該当項目なし。
注2) ()内はサンプル数。

表2-2-11 希望する進学段階(成績の自己評価別)

	(%)		
	上位層 (924)	中位層 (799)	下位層 (923)
中学校まで	0.9	1.4	4.4
高校まで	14.6	21.4	29.6
専門学校・各種学校まで	19.2	22.2	17.4
短期大学まで	8.0	8.3	5.9
四年制大学まで	23.8	15.0	11.1
大学院まで	15.8	9.6	5.5
その他	1.1	0.5	0.7
わからない	14.2	19.9	22.1
無回答・不明	2.5	1.8	3.4

注) ()内はサンプル数。

② 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男子でもっとも多いのは、「野球選手」15.7%で、次に多いのは「サッカー選手」10.2%である。それに4%程度で「サラリーマン」「医師」が続く。女子では、「保育士・幼稚園の先生」9.3%、「ケーキ屋さん・パティシエ」8.5%、「看護師」「芸能人」「ファッションデザイナー・デザイナー」(いずれも4%前後)となっている。小学生にとって目につきやすく、また、華やかで技能をともなう職業が上位にあがっている。

Q | あなたが将来、つきたい仕事は何ですか。できるだけ具体的に記入してください。

表2-2-12は、将来つきたい職業名を具体的に書いてもらった結果について作成したランキング表である。「無記入(空欄)」「未定」「なし」その他明確な職業名に分類できないものを除外している。男子でもっとも多いのは、「野球選手」15.7%で、次に多いのは「サッカー選手」10.2%である。上位2つは、特別な資格が不要な、しかし誰もがなれるわけではない職業となっている。それに対し、続く「サラリーマン」「医師」「研究者・大学教員」(いずれも4%前後)は、一定程度の学歴資格を必要とするが、大半のおとながなっている「サラリーマン」をはじめとして、ある意味で堅実な選択となっている。女子では、「保育士・幼稚園の先生」9.3%、「ケーキ屋さん・パティシエ」8.5%、「看護師」「芸能人(歌手・声優・お笑いタレントなど)」「ファッションデザイナー・デザイナー」(いずれも4%前後)となっている。小学生にとって、将来つきたい職業としての「仕事」は、①まずは、もっとも身近な職業人である親や幼稚園・学校の教員をモデルに、②他方で、テレビやマンガで描かれる人物をモデルに、華やかで特別な技能をともなうものとしてイメージされているのだろう。

次に、将来つきたい職業と成績の自己評価との関連を性別に整理したのが表2-2-13

である。ここでは、小学生の「仕事」に対する興味・関心のありようを推測しつつ、独自に14種類のカテゴリに分類し直した結果を用いている(村上龍『13歳のハローワーク』幻冬舎、2003参照)。「専門職」「管理職」「事務職」「販売職」「熟練」「非熟練」というような通常採用される分類ではない。推測の域は出ないものの、小学生からみた「仕事の世界」を想定し、彼らが自身の将来像を思い描くときに何をコアにするのかという観点から14種類のカテゴリの作成を試みた。各カテゴリに含まれる主な職業は次頁の通りである。

おおまかな特徴を性別に示すと、男子について、①「医療」系は、成績の上位層>中位層>下位層となっており、自己評価ではあるが、成績と「希望する職業」が関連を持っていることがわかる。②「事務」系は、成績に関係なくほぼ5%前後、③男子でもっとも希望の多かった「スポーツ」系は、成績の上位層および中位層では3割強、下位層では2割強となっており、下位層で少なくなるものの、成績に関係なく希望する傾向がある。④「食べ物」系は、成績の中位層および下位層が多い。⑤「無記入」の比率は、成績の上位層<中位層<下位層となっている。

一方、女子については、①「医療」系は、男子と同様に、成績の上位層>中位層>下位

層、②同様の傾向が、「芸術」系でもみられる。③成績に関係なく希望する職業は、女子でもっとも希望の多かった「先生」系、および「食べ物」系、「スポーツ」系である。④「(希望する職業)なし」や「無記入」の比率は、男子に比べると少なくなる。しかし、「無記入」の比率は、男子同様に、成績の上位層<中位層<下位層となっており、成績と関連していることがわかる。

〈職業についての14種類のカテゴリ〉

1. 医療：医師、看護師、薬剤師、医療技術者
2. おしゃれ：エステティシャン、ファッションデザイナー・デザイナー、ネイル・メイクアーティスト、美容師・理容師、フライトアテンダント、花屋さん
3. 規範：法律家、経営専門職、法務・経営関係、自衛官、警察官、消防士
4. 芸術：美術家、音楽家、作家・小説家、ダンサー、タレント・芸能人、マンガ家・イラストレーター
5. ゲーム：ゲームクリエイター・ゲームプログラマー
6. 事務：会社員、銀行員、公務員（教育・警察等除く）
7. スポーツ：野球選手、サッカー選手、スポーツトレーナー・インストラクター、バスケットボール選手、テニス選手、水泳選手
8. 先生：学校の先生、保育士・幼稚園の先生、研究者・大学教員
9. 建物：建築家・設計士、インテリアコーディネーター、大工
10. 食べ物：栄養士、パン屋さん、ケーキ屋さん・パティシエ、調理師・コック、飲食店・店員（接客）
11. 動物：トリマー、獣医師、ペットショップ、動物園の訓練士・動物園などの飼育員
12. 乗り物：鉄道運転士・車掌、パイロット、自動車製造・修理
13. エンジニア：技術者、コンピュータープログラマー
14. マスコミ：アナウンサー、テレビ・ラジオ局スタッフ、記者・編集者・ジャーナリスト

表2-2-12 将来つきたい職業のランキング（性別）

男子		%
1	野球選手	15.7 (219)
2	サッカー選手	10.2 (142)
3	サラリーマン	4.3 (60)
4	医師	4.2 (58)
5	研究者・大学教員	3.9 (54)
6	飲食店・店員（接客）	1.9 (27)
6	大工	1.9 (27)
8	芸能人（歌手・声優・お笑いタレントなど）	1.7 (24)
9	調理師・コック	1.6 (23)
10	バスケットボール選手	1.4 (20)
11	ゲームクリエイター・ゲームプログラマー	1.4 (19)
12	他に分類されない専門職	1.1 (16)
13	学校の先生	1.1 (15)
13	マンガ家・イラストレーター	1.1 (15)
15	テニス選手	1.0 (14)
15	警察官	1.0 (14)
17	鉄道運転士・車掌	0.9 (13)
18	美術家（画家・カメラマン）	0.9 (12)
18	建築家・設計士	0.9 (12)
20	水泳選手	0.8 (11)
20	スポーツトレーナー・インストラクター	0.8 (11)
女子		%
1	保育士・幼稚園の先生	9.3 (122)
2	ケーキ屋さん・パティシエ	8.5 (112)
3	看護師	4.3 (57)
4	芸能人（歌手・声優・お笑いタレントなど）	4.0 (53)
5	ファッションデザイナー・デザイナー	3.9 (51)
6	学校の先生	3.7 (48)
7	医師	3.5 (46)
7	マンガ家・イラストレーター	3.5 (46)
9	美容師・理容師	3.0 (39)
10	獣医師	2.4 (31)
11	ペットショップ	2.2 (29)
12	薬剤師	2.1 (28)
13	トリマー	2.1 (27)
14	動物園の訓練士・動物園などの飼育員	1.9 (25)
14	花屋さん	1.9 (25)
16	音楽家（ピアニスト・バイオリニスト）	1.7 (22)
17	作家・小説家	1.6 (21)
18	スポーツトレーナー・インストラクター	1.5 (20)
19	パン屋さん	1.2 (16)
20	法律家（弁護士・裁判官・検察官）	1.1 (14)
20	ダンサー	1.1 (14)
20	フライトアテンダント	1.1 (14)

注1) サンプル数は男子1,397名、女子1,310名。

注2) () 内は回答実数。

表2-2-13 将来つきたい職業(性別・成績の自己評価別)

(%)

	男子			女子		
	上位層 (512)	中位層 (370)	下位層 (476)	上位層 (406)	中位層 (425)	下位層 (439)
1 医療	7.4	4.1	2.5	14.3	9.4	8.7
2 おしゃれ	0.2	0.3	0.4	9.4	13.6	9.6
3 規範	3.1	2.7	1.9	2.7	0.7	1.8
4 芸術	6.3	4.1	6.5	16.5	12.5	11.8
5 ゲーム	1.0	1.1	1.7	0.5	0.0	0.0
6 事務	5.1	5.4	4.4	1.2	1.6	2.1
7 スポーツ	36.5	36.8	28.2	5.9	6.4	5.9
8 先生	6.1	5.7	4.0	16.7	15.1	15.5
9 建物	2.0	2.4	5.0	0.2	0.7	0.5
10 食べ物	1.2	6.8	6.1	10.8	10.8	11.6
11 動物	1.6	0.3	1.7	4.9	10.1	9.8
12 乗り物	2.9	1.1	1.7	0.2	0.2	0.2
13 エンジニア	2.5	0.5	1.3	0.7	0.5	0.7
14 マスコミ	0.4	1.4	0.2	2.0	0.9	0.7
15 その他	12.7	10.5	13.9	5.4	7.3	8.9
未定	1.8	4.3	4.4	3.2	3.8	2.1
なし	1.2	2.2	2.5	1.0	0.9	0.7
無記入	8.2	10.5	13.7	4.2	5.4	9.6

注1) 1～14のカテゴリに分類するのが難しい職業は「15 その他」に分類している。
注2) () 内はサンプル数。

5. 社会観・価値観

小学生にとっての勉強の効用は、第一に実生活にとっての有用性にある。たとえば、「よいお父さん、お母さんになるために」「社会で役に立つ人になるために」「心にゆとりがある幸せな生活をするために」である。第二に期待している効用は「尊敬される人になる」「生活を楽しむ」という内面の充足となっており、これらの効用に比べて、「出世」や「お金持ちになる」といった職業的な成功、地位の達成、経済的な成功の手段としてはとらえられていない。また、小学生にとって、幸せの要因は、「いい友だちがいると幸せになれる」93.2%である。「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」61.2%、「お金がたくさんあると幸せになれる」46.1%を大きく上回っている。

Q | ●学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか。
●あなたは、次の意見をどう思いますか。

ここでは、まず、学校の勉強の効用についてたずねている。「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」を合計(以下同)して、数値の大きな順に整理すると表2-2-14のようになる。

これらの回答率から、8項目は大きく3つに分類できる。第一に回答率が8割を超えている「よいお父さん、お母さんになるために」「社会で役に立つ人になるために」「心にゆとりがある幸せな生活をするために」「一流の会社に入るために」の4項目。ここから、勉強は実生活に有用であると考えていることがわかる。第二のカテゴリは回答率が7割台の「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」「尊敬される人になるために」の2項目。ここからは、内面的な充足を勉強がもたらすと考えていることがうかがえる。これに対して、「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」69.7%、「お金持ちになるために」47.8%という2項目の結果からは、実生活の有用性や内面の充足と比較して、勉強が将来の地位達成や経済的成功には役に立つとはとらえられていないことがわかる。

性別では(図2-2-11①)、「お金持ちに

なるために」と「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」の2項目を除き、ほとんどの項目で女子>男子となっており、女子のほうが学校の勉強に意味を見出しているといえる。

地域別にみても(図2-2-11②)、いずれの項目でも、郡部>大都市となっており、郡部のほうが勉強を有用ととらえる傾向が強いことがわかる。

次の図2-2-12①は、社会観・価値観についてたずねた8項目についての結果である。

小学生にとって、幸せの要因は、「いい友だちがいると幸せになれる」93.2%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%、以下同）である。「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」61.2%、「お金がたくさんあると幸せになれる」46.1%を大きく上回っている。

成績の自己評価別にみると(図2-2-12②)、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」「日本は、努力すればむくわれる社会だ」「日本は、競争がはげしい社会だ」「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」という4項目で、上位層と下位層の間で

10ポイント以上の差となっている。学歴の効用、努力の意味を見出すこと、そして、競争社会を勝ち抜いて地位を達成したいという意識を持つことと成績は、小学校段階から密接な関連を持っている。

また、図2-2-12①をみると、ジェンダー規範にかかわる2項目「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」「算数は男子のほ

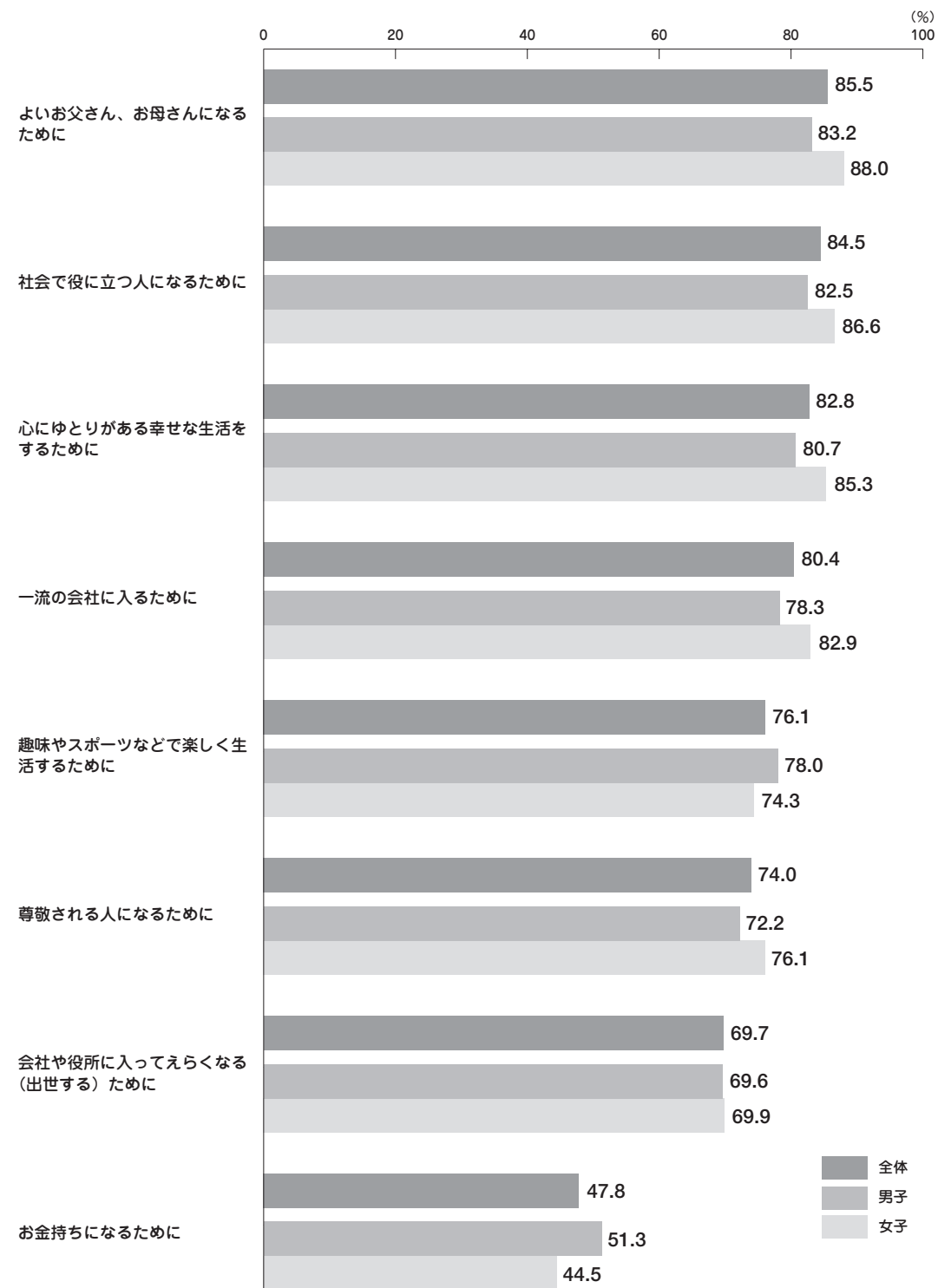
うが向いている」については、「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合計しても、それぞれ14.2%、29.4%となっており、全体としてはそれほど、小学生が伝統的なジェンダー規範にとらわれていないことがわかる。しかし、性別にしてみると、2項目とも男子>女子となっており、男子のほうが女子よりも「そう思う」比率が高くなっている。

表2-2-14 勉強の効用(全体)

	(%)
よいお父さん、お母さんになるために	85.5
社会で役に立つ人になるために	84.5
心にゆとりがある幸せな生活をするために	82.8
一流の会社に入るために	80.4
趣味やスポーツなどで楽しく生活するために	76.1
尊敬される人になるために	74.0
会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために	69.7
お金持ちになるために	47.8

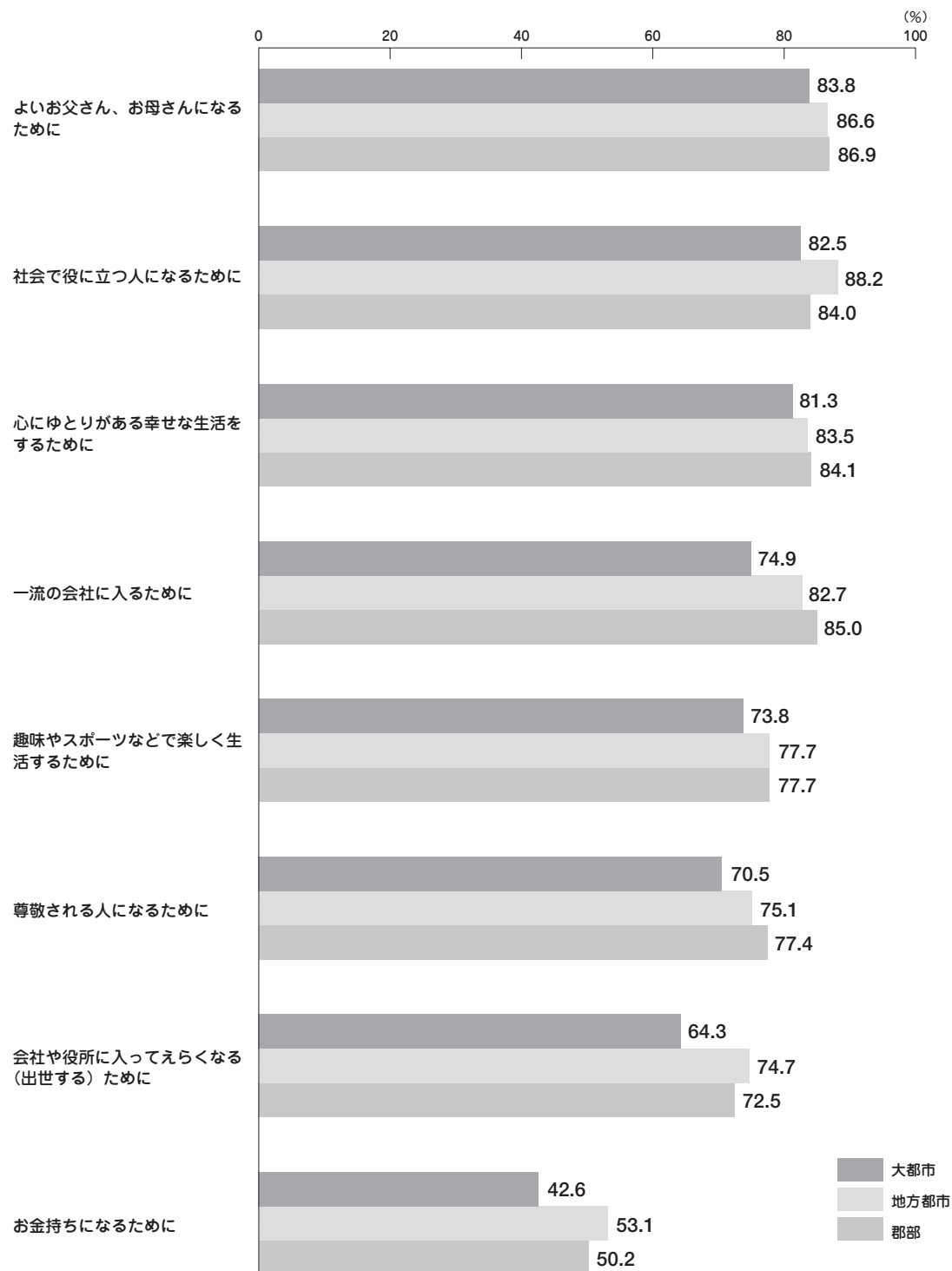
注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
注2) サンプル数は2,726名。

図2-2-11① 勉強の効用(全体・性別)



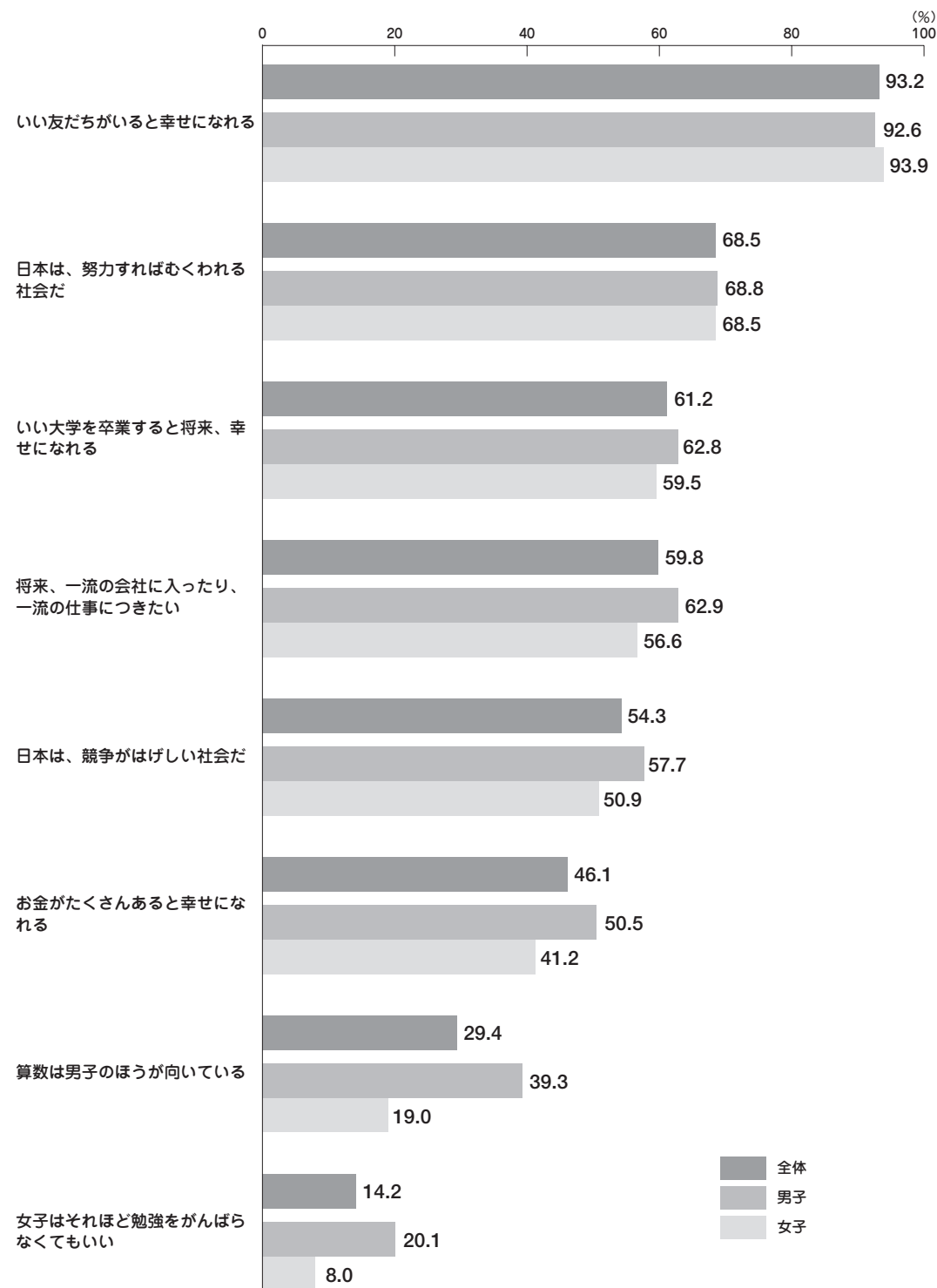
注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
注2) サンプル数は全体2,726名、男子1,397名、女子1,310名。

図2-2-11② 勉強の効用(地域別)



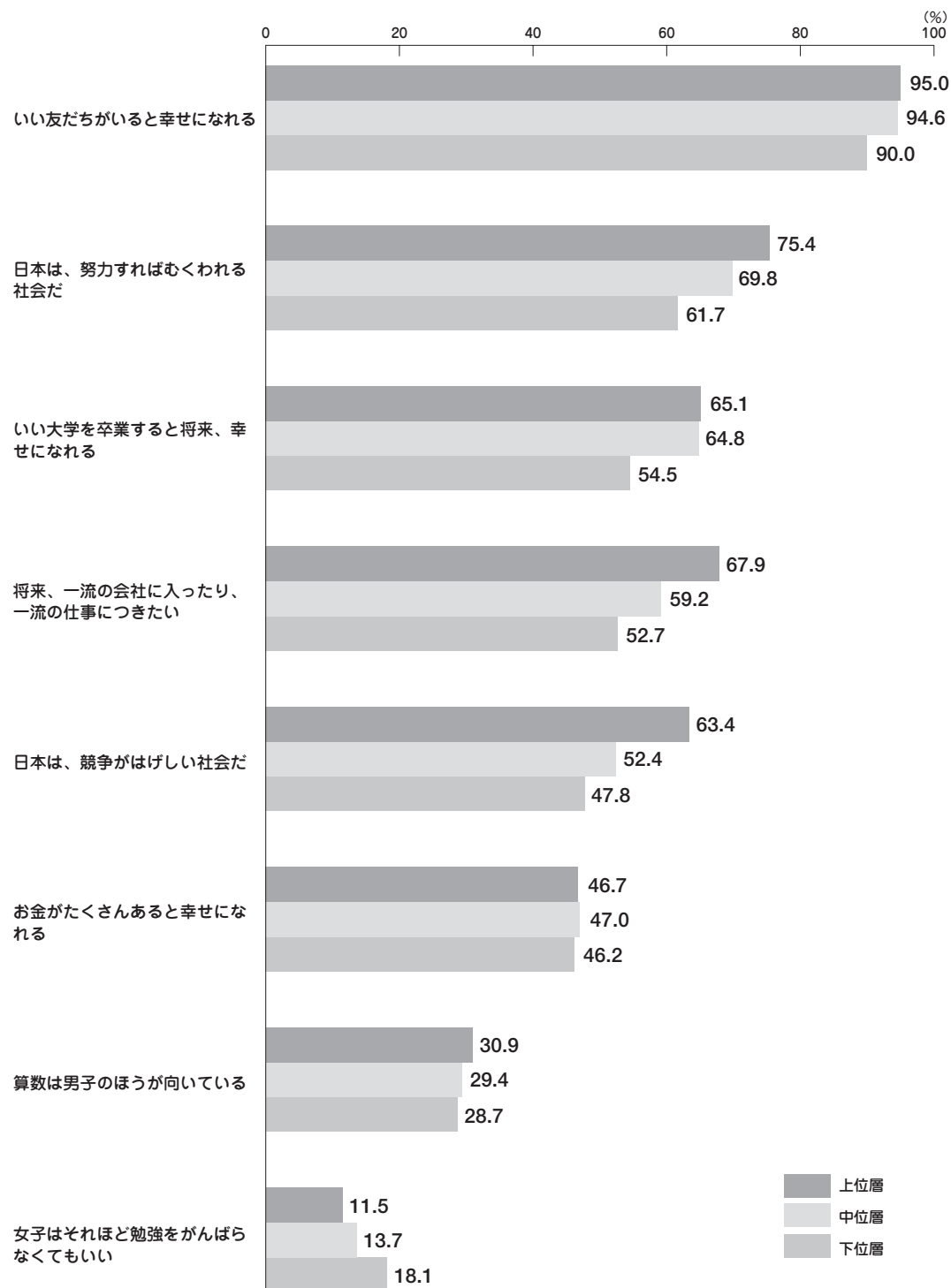
注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
 注2) サンプル数は大都市1,105名、地方都市684名、郡部937名。

図2-2-12① 社会観・価値観(全体・性別)



注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。
 注2) サンプル数は全体2,726名、男子1,397名、女子1,310名。

図2-2-12② 社会観・価値観(成績の自己評価別)



注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。
 注2) サンプル数は上位層924名、中位層799名、下位層923名。

6. 心や身体の疲れ

身体的な疲労感が上位を占め、これに精神的疲労感が続いている。「進学塾」に通っている小学生の疲労感は、塾通いをしていない小学生の疲労感と比べて大きな違いはない。これに対して、授業がわからないことが疲労感に大きく影響を与えていることがわかる。

Q | あなたはふだん、自分のからだについて、次のように感じることはありませんか。

図2-2-13で、疲労感に関する質問に「とてもそう」と「少しそう」と答えた比率の合計(以下同)をみると、もっとも高い値は、「あくびがでる」81.3%、また、「目が疲れやすい」61.7%など身体的な疲労感が上位を占めている。そして、「あきっぽい」59.0%、「いらいらする」58.7%という精神的疲労感が続いている。

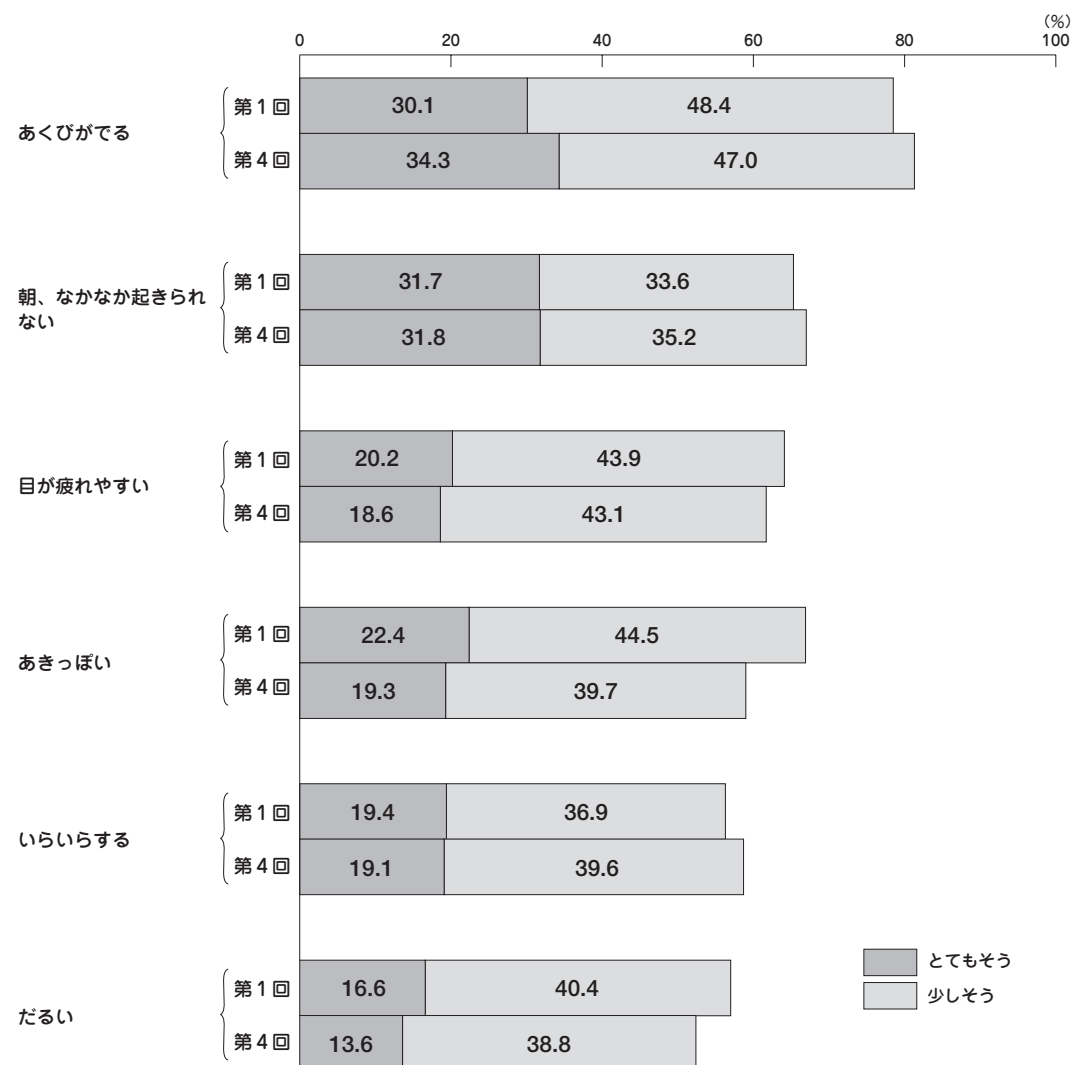
次に、表2-2-15で、通塾と小学生の疲労の関係のみてみよう。一般に、塾通い、とりわけ、週に4日以上になることもあり、1回あたりの学習時間も3時間以上の長時間におよぶ「進学塾」への塾通いが、児童の心身の健康に悪影響を与えているということがいわれている。しかし、今回の調査結果では、一般の思いこみとは異なり、「進学塾」に通っている小学生の疲労感は、「非通塾」の小学生の疲労感と比べ目立って大きな違いはなかった。「あくびがでる」比率はほぼ同じであり、「あきっぽい」に関しては、むしろ、「非通塾」の小学生のほうが多いくらいである

(「進学塾」56.3% < 「非通塾」58.0%)。

しかし学習塾、とくに「進学塾」での勉強が心身に負担を与えていないとは考えにくい。今回の結果は、塾に通っていない小学生の生活が予想外に不健康である可能性を示していると考えるのが妥当ではないだろうか。本調査は、学習基本調査であり、生活全般についてはたずねていないが、今後、児童の健康に関する生活実態についての研究を進める必要がある。

最後に、表2-2-16をみると、授業の理解度が疲労感に大きく影響を与えていることがわかる。「わかりやすい授業にしてほしい」と答えた小学生はそうでない小学生よりも、疲労感を訴える比率が高い。とくに、精神的疲労感である「いらいらする」(選択69.8% > 非選択53.1%、以下同)と「あきっぽい」(71.5% > 52.7%)では、それぞれ16.7ポイント、18.8ポイントもの大きな差となっている。心身の健康の面からも、わかりやすい授業を行うことが求められる。

図2-2-13 心や身体の疲れ(時系列)



注1) 第2回・第3回は該当項目なし。
注2) サンプル数は第1回2,578名、第4回2,726名。

表2-2-15 心や身体の疲れ(通塾の有無と学習塾のタイプ別)

	補習塾 (414)	進学塾 (389)	その他 (160)	非通塾 (1,319)
あくびがでる	82.4	81.3	82.5	80.7
朝、なかなか起きられない	66.6	69.9	67.5	66.2
目が疲れやすい	64.7	65.0	62.6	59.8
あきっぽい	60.6	56.3	61.3	58.0
いらいらする	55.0	63.7	56.3	59.0
だるい	54.1	54.5	51.9	51.7

注1) 数値は「とてもそう」と「少しそう」の合計。
注2) 無回答・不明は省略した。
注3) () 内はサンプル数。

表2-2-16 心や身体の疲れ(「わかりやすい授業にしてほしい」回答別)

	非選択 (1,817)	選択 (909)
あくびがでる	78.6	86.6
朝、なかなか起きられない	64.8	71.2
目が疲れやすい	60.0	65.4
あきっぽい	52.7	71.5
いらいらする	53.1	69.8
だるい	47.2	62.7

注1) 数値は「とてもそう」と「少しそう」の合計。
注2) () 内はサンプル数。